

二つの「え」の話～『古言衣延辨』

L2/09-062

2001年 6月27日作成
2009年 1月27日更新

目次

- [あ行のえとヤ行のエ](#)
- [漢字音\(音読み\)の場合](#)

あ行のえとヤ行のエ

表1はみなさまよくご存知の五十音図です。

五十音図を眺めた時、ヤ行の「い」と「え」の段、そしてワ行の「い」と「う」と「え」の段が、それぞれア行の仮名の繰り返しとなっていることを不思議に感じたご経験がおありの方、結構いらっしゃるのではないのでしょうか。

現代の日本語にはワ行の「い」や「え」にあたる音、「うい(wi)」や「うえ(we)」が存在せぬため、それらを表すための文字が使われることもありません。従って五十音図の該当箇所は空欄、もしくはア行の仮名の繰り返しとなっているのが今日では普通です。

しかし昔の日本語には、「うい」や「うえ」にあたる音が存在したため、当然それらを表す仮名も存在しました。

それが、今も百人一首などでたまに見かける「ゐ(=うい)」と「ゑ(=うえ)」です。

今日の日本語では、「そこに誰々がいる」の「いる」も、「何々が要る」の「いる」もまったく同じ音ですが、昔の日本語では「誰々がいる」の「いる」のほうは「ゐる」、つまり「wiru(ういる)」と発音されていて、「要る(いる)」とは違う音であったのです。

これら「い(i) ←→ ゐ(wi)」「え(e) ←→ ゑ(we)」、そして「お(o) ←→ を(wo)」の発音上の区別は、室町時代に入るまでには崩壊してしまっていたと考えられています。

しかしその後も文字として書き表す時だけは依然として区別されつづけ、この慣習は第二次大戦後、仮名の表記法が改められるまで続いてゆきました。

いわゆる「**歴史的仮名遣い**」とか「**旧仮名遣い**」とか呼ばれるものです。

では現行の五十音図に、今は使われなくなった「ゐ」と「ゑ」の二文字を加えてみましょう。表2のようになります。

現行の五十音図に比べれば、該当文字のない箇所が少なくなっていますが、それでもまだヤ行の「い」と「え」、ワ行の「う」の計三カ所が「該当文字なし」で、ア行の繰り返しになっています。

でははたして日本語の歴史上、

- ア行の「い(i)」とヤ行の「い(ji)」
- ア行の「う(u)」とワ行の「う(wu)」
- ア行の「え(e)」とヤ行の「え(je)」

これらの発音が区別されたことはあったのでしょうか。

結論から言えば上二つの区別がされていたことは、どうやら日本語史上なかったようだと考えられています。どの文献からもア行のイとヤ行のイ、ア行のウとワ行のウとが区別されていた形跡が見つかっていないためです。

しかしア行の「え(e)」とヤ行の「え(je)=いえ」については、奥村栄実という江戸時代の学者が記した『古言衣延辨(こげんええべん。『古言衣延弁』とも)』という本によって、少なくとも十世紀中頃までは発音しわけられていたことが明らかにされています。

では、なぜ歴史的仮名遣いには、ア行の「え」とヤ行の「え=いえ」との区別が反映されていないのでしょうか。考えられる理由としては、

表1 現行の五十音図

| | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| わ | ら | や | ま | は | な | た | さ | か | あ |
| (い) | り | (い) | み | ひ | に | ち | し | き | い |
| (う) | る | ゆ | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う |
| (え) | れ | (え) | め | へ | ね | て | せ | け | え |
| を | ろ | よ | も | ほ | の | と | そ | こ | お |

表2 中世～戦後までの五十音図

| | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| わ | ら | や | ま | は | な | た | さ | か | あ |
| ゐ | り | (い) | み | ひ | に | ち | し | き | い |
| (う) | る | ゆ | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う |
| ゑ | れ | (え) | め | へ | ね | て | せ | け | え |
| を | ろ | よ | も | ほ | の | と | そ | こ | お |

- 「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」、「お」と「を」の混同に比べ、ア行の「え」とヤ行の「いえ」の混同の時期が早かったため。
(「エ・イエ」の混同は10世紀半ば、「オ・ヲ」の混同は11世紀頭。「イ・ヰ」「エ・ヱ」は13世紀頃か^{*1})
- ア行のエとヤ行のエの混同後(そしてア行のオとワ行のヲの混同前)に作られたと考えられる「いろは歌」が、手習いの手本として広く使われたため。

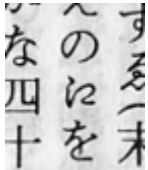
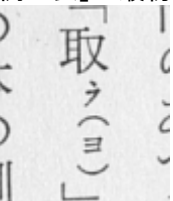
などが挙げられますが、要は歴史的仮名遣いの制定に関わった人たちが、誰もア行の「え」とヤ行の「え」とが昔は発音し分けられていたことに気づかなかったというのが、もっとも大きな理由といえましょう。

いわゆる「万葉仮名(万葉がなとも)」によって日本語が記されていた時代、ア行の「え(e)」は、「衣・依」などの漢字によって書き表され、このうち「衣」が今日のひらがな「え」のもとになりました。

同様にヤ行の「え(je)」は、「江・延・曳」などの漢字によって書き表され、このうち「江」が今日のカタカナ「エ」のもとになりました。

つまりカタカナの「エ」という文字は、本来ア行の「え」ではなく、ヤ行の「江」を表す文字なのです。

表3 あ行のえとや行のえの仮名文字例

| | ア行の「え(e)」 | ヤ行の「江(je)」 |
|------|--|---|
| 万葉仮名 | 愛(*2,*4,*7)・亞(*2)・埃(*4)・哀(*4)・衣(*6,*7,*8,*13,*14,*15,*16)・依(*7) / 荏(*2,*12)・得(*7)・榎(*7) | 叡(*1,*4,*7,*11)・延(*2,*4,*5,*7)・鹽(*3)・曳(*4,*5,*7)・要(*7,*15)・遙(*7)・縁(*8)・睿(*9)・裔(*15) / 江(*2,*4,*7,*8,*9,*11,*12,*13,*14,*15,*16)・枝(*2,*4,*7,*10)・兄(*7)・吉(*7)・柄(*7) |
| ひらがな | 「え」(「衣」の草書体に由来) | 例:「江」の草書体に由来する字形  『広辞苑』の「あめつちの詞」より |
| カタカナ | 例:「衣」の最初の三画からなる字形 ^{*2}  築島裕『平安時代語新論』東京大学出版会・341頁より | 「エ」(「江」の右側に由来) |

- 万葉仮名の欄は、大矢透『古言衣延辨證補』・橋本進吉「古代國語の『え』の假名について」『文字及び假名遣いの研究』を参考に作成した。
- 万葉仮名の欄、*1 のごとき記号はその文字が使われている文献を示す。番号と文献名との対応は以下の通り。
*1 上宮聖徳法王帝説 / *2 古事記 / *3 出雲風土記 / *4 日本書紀 / *5 續日本紀 / *6 佛足跡歌 / *7 萬葉集 / *8 日本現報靈異記 / *9 續日本後紀 / *10 三代實録 / *11 延喜式祝詞 / *12 新撰萬葉集 / *13 新撰字鏡十二卷本 / *14 新撰字鏡二卷本 / *15 延喜六年日本紀竟宴和歌 / *16 本草和名
- 奥村栄実『古言衣延辨』及びその(補)の部分(高橋富兄によるとされる)では、この他にもア行のえとして「英・娃・鬻」が、ヤ行のエとして「穎・胞(補)・盈(補)」が挙げられている。これらは橋本進吉「古代國語の『え』の假名について」『文字及び假名遣いの研究』で検証されていて、「娃・鬻」「穎」については衣延辨と同じ結論、「英」「胞(補)・盈(補)」に対しては異議が唱えられている。

もし、いろは歌にア行の「え」とヤ行の「エ」の区別が織り込まれていたなら、歴史的仮名遣いの五十音図は表4のようになっていたことでしょう。

表4 ア行のえとヤ行のエとを区別した五十音図

| ひらがな | カタカナ |
|---------------------------|---------------------------|
| わらやまはなたさかあ | ワラヤマハナタサカア |
| あり ^(イ) みひにちしきい | アリ ^(イ) ミヒニチシキイ |
| ^(ウ) るゆむふぬつすくう | ^(ウ) ルユムフヌツスクウ |
| ゑれ ^(エ) めへねてせけえ | エレエメヘネテセケ ^(エ) |
| をろよもほのとそこお | ヲロヨモホノトソコオ |

※研究者の方で、この2字がコンピュータ上で使えたら良いと思われる方は、e.ye@akenotsuki.comまでご連絡くださいませ。

ではこの節の最後に、奥村栄実『古言衣延辨』・大矢透『古言衣延辨證補』を参考に作成した「[ア行のえとヤ行のエとの区分表](#)」へのリンクを示します。

- [ア行のえとヤ行のエとの区分表](#)

参考資料

- [奥村栄実・大矢透著『古言衣延辨』『古言衣延辨證補』勉誠社文庫 22・中田祝夫解説・勉誠社\(現・勉誠出版\)1977年](#)
- 橋本進吉「古代國語の『え』の假名について」『文字及び假名遣いの研究』岩波書店

*1秋永一枝「発音の移り変り」『日本語講座第6巻 日本語の歴史／阪倉篤義編』1977年／大修館書店

参考文中では「イとキ、エとエの混同は語頭以外に早くおこり、個別的な混同をのぞくと院政開始(一〇八六)頃より進行をはじめ、鎌倉中頃にはほぼ完了したもようである」とあるが、ここでは鎌倉中頃を13世紀頃と解釈した。

*2大坪併治『石山寺本大智度論古点の國語學的研究 上』(風間書房)のP90-91によると、平安初期の訓点資料においてはそこそこ用例のある字形らしい。

ただこのことは、古経蔵に眠っていた經典に付された古点の研究が、まだ進んでいなかった時代にはあまり知られていなかったようで、『古言衣延辨』の著者奥村氏は、「衣」の下部を取ったと思われる「K」のような字体を独自に使っている。

また『古言衣延辨證補』の著者大矢氏も、「衣」の上部からなる「丄」という字の使用を提唱している。

一方短所は、流線的な字体が多い平仮名の中に「エ」という直線的な字体が混じっていたり、その逆に直線的な字体の多い片仮名の中に「え」という流線的な字体が混じっていると、やはり浮いてしまうというあたりでしょうか。

いずれにしても代案は所詮代案です。「や行のえ」にしても「ア行のエ」にしても、それぞれ専用のコードポイントがあったほうが便利なことには変わりありません。

もしJISコードやUnicodeの制定に関与している方が見ていらっやいましたら、是非「ア行のエのカタカナ」と「や行のえのひらがな」のコードポイントを追加していただきたいところです。十世紀以前の文書を電子化したり、研究したりする際に役立つことと存じます。

→

漢字音(音読み)の場合

今日「歴史的仮名遣い」と呼ばれている仮名遣いは、平安時代の発音に基づくものとされています。しかし実際のところ、平安時代には区別されていた発音のうち以下3種類については、今日多くの古語辞典・国語辞典等が使用している歴史的仮名遣いに反映されていません。

- キ・ギ (ki, gi) ←→ クキ・グキ (kwi, gwi)

- ケ・ゲ (ke, ge) ←→ クエ・グエ (kwe, gwe)
- え (e) ←→ 江 (ye)

このうち上2つ(キ/ギ←→クヰ/グヰ・ケ/ゲ←→クエ/グエ)の区別は、漢和辞典によっては『学研漢和大字典』(詳細は後述)のように書き分けているものもありますが、ア行のえとヤ行の江の区別だけは、今のところどの辞典からも顧みられていないようです。

そこで個人的に、漢字音(いわゆる音読み)においてもかつて存在していたであろう「え」と「江」の区別を推定する方法についてまとめてみました。

漢字音における「え」と「江」

漢字の音読み(漢字音)において「え」と「江」の区別を推定する際、ポイントとなるのは以下の2点です。

- 呉音・漢音が日本に伝わってきた当時、各漢字が中国でどう発音されていたか。
- そしてその発音が当時の日本人にどう聞こえたか。即ち当時の中国語の発音が、当時の日本語の音韻体系にどう溶け込んでいったか。

まず最初の「古代中国における漢字の発音」を知る方法ですが、個人的には『学研漢和大字典』(藤堂明保編・学習研究社)を使うのが現状ではベストなのではないかと考えています(※注:今は改訂されて『学研新漢和大字典』となっているようです。普及版・机上版の2種類あるようです)。

現代中国語の発音が併記されている漢和辞典は珍しくありませんが、中国における発音の変遷が載っていて、かつ個人でも入手しやすい辞書となると、私が知る限りこれが唯一です。

従って以下ではこの辞典を使い、字音において「え」と「江」を区別する手順について述べます。発音記号もこの辞典が使っているものを流用します。

同大字典で字を引くと、ハイフンで区切られた発音記号が4つ載っています(参考図)。このうち上から2番目の発音記号が、呉音・漢音に関係のある音です。

つまりこの2番目の発音を、昔の日本人がどう聞き取ったかというのが先に挙げたポイントの2つ目です。

字音において、「え」と「江」と「彘」を判別する方法

20080319: この部分は現在書き直しを行っています。

江は拗音として使われたか

拗音というのは現代の表記法において、イの段の仮名文字に小さなヤユヨを添えて表記される「キャ・シュ・チョ」のような発音のことです。漢字音の場合、ほとんどの行が直音と拗音の対立、例えば力行なら「ka, ku, ko(カ・ク・コ)」←→「kya, kyu, kyo(キャ・キュ・キョ)」のような対立を有していますが、果たしてヤ行のエもヤユヨ同様、かつては拗音として使われていたのでしょうか。

今のところ、えと江とが発音し分けられていた時代の文献にも、「ke(ケ)」対「kye(キエ・キェ)」のような書き分けをしようとした形跡は見つかっていないようです。従ってヤ行の中でも江だけは拗音として使われなかったと見て良さそうです。

これは半母音yと母音eとは調音位置が近い、つまり舌の移動距離が小さいので、前に別の子音が来て「子音+y+e」という音の並びになると、yが埋没してしまってその有無が聞き取りづらかったためと考えられます。

ちなみにこれと同様の現象は合拗音(w)にも見られます。合拗音(w)の場合、「ka, ki, ke(カ・キ・ケ)」←→「kwa, kwi, kwe(クワ・クヰ・クヱ)」という対立はあっても、「ko(コ)」←→「kwo(クワ)」という対立はなかったとされています。これも半母音wと母音oの調音位置が近く、koとkwoの違いが聞き取りづらかったためと考えられます。

子音k/gで始まる音一覧(もっとも種類が多かった時期)

| | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-----|-----|
| k- | キ／ギ | | カ／ガ | | ク／グ |
| kw- | クキ／グキ | クエ／グエ | クワ／グワ | コ／ゴ | - |

『学研漢和大字典』に関するあれこれ

同大字典で調べ物をしていて気づいたことの備忘録です。

- 「唯」や「遺」などは、一般に流布している歴史的仮名遣いでは「呉音ユイ/漢音牛」とされていることが多いが、この辞典では漢音が「イ(ヤ行扱イ)」とされている。

これは「いの段」の漢字のうち、声母(子音)と介母(半母音)とが[yiu-]という並びになるものに見られ、他にも「允」や「尹」のような例がある(ともに従来の歴史的仮名遣いでは呉音漢音とも「キン」とされていることが多いが、『学研漢和大字典』では呉音漢音とも「イン」)。

どうやらこの辞典では、四等字(明瞭なを含む字)は開合(uを含むかどうか)に関係なくヤ行として表記されているらしい。つまり介母が[-i-]の場合はもちろん、[-iu-]の場合も一貫してヤ行としているようである。

これは見方を変えれば、「同大字典では-iu-型の介母を含む字の場合、『ワ行要素のほうを切り捨てるのが適切』という考え方でカナ表記を行っている」とも言い表せる。

個人的にはこうした一貫した姿勢というのはむしろ望ましいと考えているが、ただ文献の中にはこの辞典の表記と矛盾する用例も散見するようである。例えば同大字典において「缺(k`iuet)」は「呉音ケチ・漢音ケツ」とされていて、やはりワ行要素のほうを切り捨てられているが、『日本漢字音の歴史』には「クエチ」という、ワ行要素のほうを生かした表記例が載っている。

[-iu-]のような音は、当時の日本人にはヤ行のようにもワ行のようにも聞こえたであろうから、個人的にはこの音について、ヤ行・ワ行のどちらが正しいとも、どちらにすべきとも考えていない。従って上でもこの辞典の考え方にならい、-iue-型のところはワ行要素を切り捨てて「呉音・漢音ともヤ行の江」とした。

ただもし[-iu-]のような音はワ行要素のほうを生かした表記にすべきと考えるなら、上に示した表の「(y)iu-」は、「ゑ(呉音漢音とも)」のところへ移動させる必要があろう。

それと平行して同大字典で仮名表記が「ケ-」「ゲ-」となっている字のうち、中古音が[kiu-][giue-]であるものについても、「クエ-」「グエ-」と解釈しなおす必要があろう。

参考資料

- 『韻鏡』寛永五年板
- 『学研漢和大字典』(藤堂明保編・学習研究社)
- 『日本漢字音の歴史』(沼本克明著・東京堂出版)

[\[↑一番上へ\]](#)

[資料室の目次へ戻る](#)

[京言葉のトップへ戻る](#)

この頁に関するお問い合わせは、e.ye@akenotsuki.comまでどうぞ。